田口卯吉著

日本開化小史

巻之六

和書門
八八二五
一八
六六七六
類號函架冊

内閣文庫
一四四函
二架
六冊
八八二五號
和書類

内閣文庫

番號	和 8825	
冊數	6 (6)	
函號	140	50

国立公文書館
National Archives of Japan

田口卯吉著

日本開化小史

六帙

田口氏藏版

帝國圖書館藏

日本開化小史卷の六目録

第十二章
文學進歩の景況
文學貨財の進歩常に小遲速あるとは雖も大体に於ては併行せ
二千四百年代の文運に撥乱反正二千五百年代の
文運に守成修補
封建開化の性質（上下懸隔、重族）
社會に自ら救治を為す
社會の發達は草木の發達の如し之を發達せしむ
るの方法覩やすし

国立公文書館
National Archives of Japan

第十三章

徳川政府ハ不利なる勤王心の發達

謀反の口實

忠義心ハ封建制度ニ利ふるう為めハ發達セ

忠義心大ハ發達シて徳川政府ニ不利となる

歴史、和學、儒者、勤王心ヲ鼓舞す

勤王心ヲ徳川氏を倒セハ足らぞ之を倒セ外寇ニ

あり

愛國心の勃興

徳川政府、天子の詔を以て開港せんと欲セ

此策成らぞして徳川政府之を専決セ

諸侯の志士天子を奉して攘夷を行ハんとセ

御上洛の失敗

各地騒擾

長藩を討して勝たず

将軍政權を奉還セ

将軍恭順謹慎

輿論坑セべからぞ

外交一ゝび開くるとセ徳川氏の制度復た維持

すべらず

日本開化小史卷之六

第十二章　德川氏治世の間に世に顯はれたる開化の現像

田口卯吉著

右の如く外物の有樣進歩せしうば心裡の有樣亦發達せざるを得ず其景況左の如し

戰國

文學の概況

戰國の時に當りて下野に足利學校あり相模に金澤文庫あり京都に五山（南禪寺東福寺天龍寺相國寺滿壽寺）あり文學を保護せり足利氏若くは管領家の補助によりて維持せられ所領あり自家の戰爭に暇なく武人も文章の事に久しく僧侶の司る所となり平時に宣戰講和の文を交際に至るまで皆僧侶の人と就中禪理尤も當る程の人も緇衣念珠云ふ武人の學問は孔孟の道を絶て無識者の學ひなき者多く僧侶と英雄豪傑と社會知識と跡を絶て凡そ行ふ社會の人とを社會ふ行ふ為ふ

佛の人多時社會の文運
ふ落ち ふ れ そ 僧知地
識も多く称せられ書籍に渉れもれ人と雖
の物事当時出の事学術のて事唯行の
も学ふ況記て古代書を
草の新撰萬葉頃詩歌
の類 英雄豪傑の士
た見て感慨催像詩歌連俳
ふ とも 其 と 想 能 述 ふ
故 舞 且 つ 又 謡 を 自 も
ふ ひ て 知 て 樂 ま 然 亦 就
前後織田豐臣二氏出進
文章の識見能止

歩淨瑠璃の文章も此時代彼
た よ り そ 而 漸 て ふ 多く世に出し
幽齋松永貞徳の下長叟
と 究 後 人 益 皆 嘯 細川
著 あ 世 を 社 未 歌 学
孟 講 ま 行 と 者 ざ る 孔
此 書 藤 原 ふ 然 き 敏 明
時 の 惺 窩 紛 乱 闘 朱 窮 理 開 の
学 研 究 永 世 行 と 争 生 性 明 の
支 那 宋 開 け の 心 時 ふ 代 理 当 学 て 注 文
学 大 国 初 め 唱 へ 程 窮 の 天 蓋 於
ふ 国 ふ 儒 士 敦 頤 愈 密 ふ 代 理 学 て 意 の 會 の
研 釋 理 諸 周 と 出 程 顥 孔 子 格 程 ふ 理 当 学 是 知 と 大 ま
究 ふ 学 因 士 敦 頤 孔 子 格 物 頤 り 是 致 知 意 の 大 ま
此 性 理 出 程 顥 孔 子 格 物 頤 致 知 意 の 會 の
傳 学 理 り て 程 顥 孔 子 格 物 頤 致 知 意 の 會 の
へ 盛 所 て 孔 子 格 物 頤 致 知 意 の 會 の
く ふ あ 黙 孔 子 格 物 頤 致 知 意 の 會 の
惺 行 ま ふ 子 格 物 頤 致 知 意 の 會 の
窩 ハ き 於 の 物 頤 致 知 意 の 會 の
氏 れ 是 て 道 致 知 意 の 會 の
を 終 り ふ

て 蓋 を 奉 せ む
ふ 此 時 乱 漸 く
至 定 り 容 ふ
我 国 の 氣 運 亦 之 代 ふ
き と 見 え た り と
ま 先 二 千 年 代 の 末 玄 恵 法 印 云
始 り て 朱 註 を 説 け る も 当 時 氣 運 の 云
り 然 き と 説 き 為 り ふ や
未 た 至 ら ま た 玄 恵 法 印 云
た ひ 其 種 子 れ る 発 す ふ あ
一 も 終 ふ 成 長 そ ら 能 す
そ 玄 恵 死 せ て 後 二 百 氏
餘 て 其 始 め 惺 窩 氏 の 学 時 機 舞 際 そ
年 出 大 鎮 定 学 と 敦 ふ 一 玄 恵 死 せ て 後 二 百 氏 の 学 時 機 舞 際 そ
蓋 て 禍 乱 の 惺 窩 氏 の 学 時 機 舞 際 そ
盖 て 禍 乱 の 惺 窩 氏 の 学 時 機 舞 際 そ
恵 た ら ん の 惺 窩 氏 の 学 時 機 舞 際 そ
て 当 時 依 然 と 盛 ま て 朱 乱 も 亡 学 と 奉 を
排 斥 て 儒 学 弘 め ん と
欲 そ て 其 志 驚 く へ と
雖 も 亦 幸 運 の 人 と 云 出
ふ べ 然 ま と 雖 も 氏 の 人 と 云 出

足利氏の駁を失せ
海内鼎沸人心代道藝ふ
用ふ る 醫家亦僅に宋
用 ふ る 醫 家 亦 僅 に 宋
司 方 等 と 奉 て 固 陋 自 正
足 利 氏 の 駁 を 失 せ
海 内 鼎 沸 人 心 代 道 藝 ふ
用 ふ る 醫 家 亦 僅 に 宋
司 方 等 と 奉 て 固 陋 自 正
のら の 項 安 た 二 千 二 百 三 十 元 亀 天 正 項
曲 直 瀬 正 慶 ふ る 代 宗 の
専 ふ ら 直 瀬 正 慶 ふ る 代 宗 の
造 詣 恒 徳 李 朱 の 法 諸 家 治 効 亦 参
造 詣 恒 徳 李 朱 の 法 諸 家 治 効 亦 参
極 雲 林 諸 代 宗 と
り 深 く 治 効 亦 参
皇 国 名 醫 傳

醫學

ふ あ ら さ れ そ 徳 川 氏 の
文 運 未 た 此 の 如 く 速 に 發
達 せ ば る べ

二千二百六十三年ヨリ二千三百年マデ
（将軍）家康　秀忠　家光
（年號）慶長　元和　寛政

朱子學

惺窩の弟子林羅山徳川氏に用ひられ大に程朱の學を弘む羅山博學強記にして著書數百部あり石川丈山詩を能くし我國中興の詩宗と称す堀杏庵那破活所林羅山松永尺五と称して四天王と云ふ朝山意林庵五山の長老に學ひ終に儒となる皆宋儒の說を奉したるゆゑなり

王陽明學

近江の人中江藤樹王陽明全書を得て大に喜び始めて其說を唱ふ王氏の學是より起る藤樹篤學にして品行方正なり世人称して近江聖人と云ふ

醫學

曲直瀬正慶の子正紹正紹の子親純三世相續て家聲を墜さず一時の俊彦多く其門に出づ各國譯の書を著撰し金元の醫風麋然世に被きり岡本一抱に至り更に詳密を加へ俗士蒙生と雖も皆能く醫籍を解す其功偉なり是を丹溪流と云ふ蓋し明の朱丹溪の治法を奉するか故なり皇國名醫傳岡本一抱は二千四百年代の人なれども今ま文の續を惡しきゆゑ玆に記入す

二千四百年代
（将軍）家光　家綱　綱吉　家宣　家継　吉宗
（年號）寛永　正保　慶安　承應　明暦

朱子學

林羅山の子春齋其子鳳岡亦朱子の說を奉し德川政府の祭酒となる其學愈よ盛なり是時に當りて土佐に野中兼山あり備前に熊澤蕃山あり皆經濟を以て世に名あり江戶に由井正雪山鹿素行あり其は軍學を以て著はる此四子は二千四百年代の初めに當りて各々一方に振ひしは俊傑にして尋常讀書の人にあらず蓋し所謂活儒なるもの歟其宋儒の說に於ける必ずしも深く奉せず山鹿素行聖經要錄を著し程朱を非とし蕃山の集義和書外書大學或問等頗ぶる卓見多し思ふに久しく戰乱の為めに壅塞せられた

る日本の智力玆に至りて始めて勃興したるものか其後宋儒の學愈よ盛んになれり今其重なるものを舉げんに山崎閒齋木下順菴貝原益軒藤井懶齋仲村暘齋五井持軒五井蘭州の輩皆碩學大儒を以て称せらる而して其著述亦多し此時明の人朱舜水我國に来り水戶に聘せらる水戶侯光園學を好み和漢の書を集めて以て學問を奨励す水戶の文學是より盛んなり是を以て二千四百年代の末に至りて是等の子弟の顯はるゝもの甚多し閒齋門には三宅重固佐藤直方淺見綱齋木下門には新井白石室鳩巢雨森芳洲祇園南海榊原篁洲水戶に於ては安積澹泊齋三宅觀

萬治　寛文　延寶　天和　貞享　元禄　寶永　正德　享保　元文

復古學

斯朱漢學旺盛ふなるを註ゝ多くて心とは

瀾皆朱學を奉す

そ其時勢の然ら問又異論の發なるは

此て復ふ古學を主ふ意曰く性理の師程學唱ふ始

其の言は是を容きふて孔子その説朱と孔子等

佛子補ふ説ふ兼ねて性を京伊藤仁齋

も孔子の性理を主とし抑

代孔子の學問の止水の全體遺

とのも學ぶ性に沖て儒教佛

書無老朕滋辭其子東涯蘭嵎

經濟學

熊澤蕃山の大學或問物徂徠の政談太宰春臺の經濟學と称そ

又一家言を立つ宋儒の學

之を衰ふ

服そ

開化史

白石の卓見なる深く社會の理ふ注目そる所あ

史興廢の理を述ふ後世史

府餘論を著日本古來政讀

家其餘澤を蒙る運を飾ふ

蓋當時の文

足の一書ふ

和學

廢舞島周子務儒辨皆日も我れを舊の李古護て説其

そ錦南太と名是のの治學書王學園始を弟

平海江服宰て痛學み天因と明を隨め鼓子

安内の部春門擊則れ下て益廢讀の駁筆宋舞並

の一徒南臺戸等乃ら皆ら歎くてみ人と儒そ河

宇時從郭安を思のちん是ん宋大王た著の此天

士之い平藤立孟書論やふやて儒古ふ世て説時民

新うて野東て戊を語千り滔曰の代感貞仁を物等

同為之金野り詆著徴古豈く非の李か齋奉徂大

士ふを華山其譏辨以唯た豈と文盡攀其の徠

朗風鼓鳴縣弟宋道来今唯知辞く龍後復て出其

此時
二下
千河
四部至
萬長
百流て
葉大
集年和
古代學
源代亦
氏の阪
言氏進
次語物始
語文語め
僧章等早
契
大
曰
明
の
そ
凡
流
言
ふ
の
過
い
闕
古
及
た
次

研究釋ふ
長流學師
沖と此此
と此梯
とくふ
説近ら
世め
の人も
唯のそ
ことて
中覺古
川ぶ書昭
道の比
流凡見橋蹊
の明
説あ
説ふ
傳ふ
ふと
ふそ
過さ
一起
事社
道ふ
道あ
の比
言ふ
の過
説
註
釋
究
師
學
と
の
せ
歌興親
學せ友
古歌り
書昭伴
と法高
見橋蹊
明
の
そ
大
曰
契
章
等
早
古
代
之
ふ
の
次
言
氏
語
物
始
語
文
語
め
僧
章
等
早
契
大
曰
明
の
そ
凡
流
言
ふ
の
過
い
闕
古
及
た
次

ふと
ふる
透説
過さ
其傳
中ふと
或ふそ
事社
一り
道ふ
語此
過徴師
一不
と此
と及
古
闕
い
過
ふ
の
言
流
凡
明
の
そ
大
曰
契
章
等
早
古
代
之
ふ
の
次
言
氏
語
物
始
語
文
語
め
僧
章
等
早
契
大
曰
明
の
そ
凡
流
言
ふ
の
過
い
闕
古
及
た
次

なく
ひと
此道
開な
てあ
ふさ
それ
是と
こ一
次た

国立公文書館
National Archives of Japan

れて千歳の一人といはんも過ぎ言ふあらず其門人田
ふ今井似閑海北若冲野
忠兵衛あ時益田春滿家代
契冲の萬葉集を以て過ぎ
の巻の契冲の説密に代
立つ見ゆ此翁
も一の層登りて説を立て発明
ハ北村季吟亦た
す多し

俳文

俳家奇人傳松尾桃青芭蕉
の條云曰く古俳諧の連歌
と波津の浪と藻草は頼義難
朝臣「みちのくの」「あしもとの」「あやめ」「菖蒲」「草まくら」「空」
似たり「けり」「廣き」「海」
西行法師「深き」「海」
す

離れて天下後世に俳
諸中興の大祖と称譽せらる
る、も宜しく「榎本其角」服部嵐雪其他著名の弟
子多し而して俳文の一体
実に至りて起る
と云ふ

狂言作者

聲曲類纂昔は浄瑠璃作者
と定まりたるは遊人
すく俳諧の師或ひは遊
の類文辞に巧みなるも
を慰みとして作らん
て作りしものを又おの
有りと浪花の俳諧
師井原西鶴といふも
なつけ浄瑠璃又其後陳
島ふとい作る
ハ近松翁出て専ら浄瑠璃
と作り始めしより古に

瑠璃作者と梅翁の門下より戯作
阪談林の一人なり
松翁と其門人なり
云ふ近れ

古今役者大全村山又作者
座と杉三安と作兵衛
久屋九郎右衛門座
四郎と作者あり
段上手の作者
京都万太夫の芝居
左衛門は藤の花
直衛門怨霊大蛇壺
の松と成る
と工夫
くて
弥五右衛門と
花車形ふて狂言
人なるむ作者の名
言なるは
ふ三番つゝき今の二番ふは
始め番(中暑)富永平兵衛右衛門
狂

幽家玄集杜んの律と集り韻あり次聞
のの体寂のを寥風は撰ふ聊
人と骨根を聊遊ひたと晒
情とさ稍カ談眼て宗談落新難
のと探理をく見林を上房林
屈往りゆを開手たと人との式を
とく山遂離てれ称と発宗大御松座句鑑ふ書紙く

絶起因り免永のと守事れ宗一の句海
倒古そ許貞準撰武も俳長二老
翁せて風定と徳縄ふ等な諸掛河句の
項芭一と蒙一もと犬くも発のを
其蕉一いむ時感こりた立雖筑只波言句頃と
風蕉こ是の破時てひさも言句集捨挙ふ翫や
遊り時ふ九りい集飛な句於べら
ひたと晒ふ重たり飛梅を とてり
た落新難る体波其り梅を一千宗い灰宗斯
と談落体波其り梅を一千宗い灰宗斯
て宗談林と人との式を一千宗い灰宗斯
上房林と人との式を一千宗い灰宗斯
手たと人との式を一千宗い灰宗斯
と人との式を一千宗い灰宗斯
称と発宗大御松座句鑑ふ書紙く
離てれ

其年暮に次て延宝八年の顔見世と成り番附作者名を書くせたり是まて吉右衛門達三郎左衛門金子曲ふ名高し聲類纂江戸名所咄和泉太夫浄瑠理と云ふ清兵衛作と云ふ金時作さいつの平ふ程子と云ひろ子をいたけなりと渡邊の綱やうに云ひは昔が傳へ辨慶時宗朝比奈なる彼金平ぶ片手ふ足らぬ様ふ平ぶこと力乱神を語らず怪力乱神を好むこと者ども

又た岡清兵衛作と金平鬼とひたぐ等の事を専らふ著し金平節とて享保の頃金平最後と題し事をけやけるとうや評判あり金平蘇生をくたりて再ひて作を直おてうやとりけかとうや

萬國地理書

新井白石羅馬人及ひ和蘭人萬國の地勢を問ひ采攬異言を著そ是も我萬國地理誌の始めふり

醫學

李朱の醫道其後一ふ穩重を主とし其弊迂拘卑泥姑息養癰ふ至りうる享保元文の際名護屋丹水後藤

良山の徒稍く復古を唱へ是ふ於て豪傑迭ふ起りて而之和を吉益東洞ふ至り直ふ秦に沂り西目張たれも懲創太ふ一過さ或ひ武斷ふ失そ変そ然ふ古法家と云ふ

天文學

貞享の頃保井算哲貞觀暦誤謬ふ成發見新暦を作ふ之を貞享暦と云ふ次さ中根元圭西川之ふ如見の諸子皆ふ暦算ふ精さを以て著ふ

二千五百年代（将軍）吉宗　家重　家治　家齊　家慶　（年號）寛保　延享　寛延　寶暦　明和

復古學

二千五百年の高足の方より盛んに當りて物門を動かし技を以て其の古文辞を修め其の説を鼓して高山蘭亭熊耳宇宙を誇り服部南郭常道青木敦夫の書を賞し湯浅龍洲伊藤東涯の魁を推し井田蘭臺の奥を極めて三千の士を平居無事の唯唐宋の文を以て古文辞を修めて其の説を消し故に平生の讀書は常に文章の解釋を難しとし世人の文を難しとし思ふに古學の衰へ久しく積善の家に在りて其の説を易しとし古文辞を以て詩を作り人の譽を求めて世の人の文を作るを如組ミ合ハセて巧みに詩を作れり梁田蛻巖秋山玉山皆二千五百の學士なり

文章家

然れども文の解釋は難しとす文辞を修めて博識を誇り此學風天明寛政の頃に至りて江戸を中心として盛なり

朱子學

物井龂氏の學は方宅石菴等の懐徳堂の中に盛なり龂菴は三阪大を維持せり龂菴の朱子學は積善學院を開き

安永　天明　寛政　享和　文化　文政　天保

積善の家に在りて豪邁卓犖なる物氏を排し益々家學を弘めて然も此時の固陋朱學に似て舊説を排し時に新説を立て抑揚排奪の目的を以て大に世を怒らせり龂菴は尾藤二洲因て賀茂川の清流を汲み栗山古賀精里春水多逸の士を召して政を司らしめ中井履軒の徳を慕ふ

豊山安積艮齋の輩あり皆性理を主張せり文學を奉じて強ひて宋儒を排し漢唐の註疏を取り明の諸家の説を捨て孔子の遺説を尋ぬ

折衷學

朱學の再興は先ち折衷學の起りて盖し宋儒の事に於て如何に最も盛なり

所なりと云へり然れとも金峨ハ井蘭臺の弟子なれど蘭臺朱學を信せず金峨の此說を發すゟし盖し時勢の既ふ熟そるもれあ至と見えたり原雙桂梁田蜺巖紀平洲南宮大湫亦折衷の說と唱へしものなり然きと最も此說然主張し徂徠春臺等の說と駁せしものそ金峨ふ如くハなし次き子奮起して山本北山太田錦城の二子奮起して...を唱へ最も修辞の弊と痛論し韓排歐蘇を推して專ら清新流麗平散暢達を主とせり盖し古文辞の弊を除きしは北山の功居多ふして經義の明瞭ゟふりしそ錦城の功居多なり中井積德大阪ふ沙り文章を以て鳴る其後諸家と考證折衷そはを以

て世ふ著名なるもれ朝川善菴安井息軒芳野金陵の輩あり

和學

荷田春滿の姪在滿其子御風徒と延きて敎授そ從ひて學ふもれ極めて多し此時和學又復古の說あり加茂真淵荷田春滿ま從ひて學ひ大ふ復古の說と唱へたり和歌そ萬葉集體と摹傚り文章亦古言と剽竊を國學者流翕然之ふ趣く徂徠春臺等日本と称して東東と云ふ真淵之ま激し以為らく我國固と神聖の良道あそ陶虞三代の道入りしまり良道泯ふと即ち儒學を仇視しカを竭して之を排擊せり其門藤原宇万

伎楫取魚彦本居宣長橘千蔭村田春海等最も顕ま宣長博學ふして古事記傳を著を其他有益の著書多し其弟子平田篤胤益く和學ま固執し儒佛を併擊せり盖し玆ま至りて僻見を免うはへからすと云ふ然れとも我國文典の開けたるそ實ふ數子の功ま因まな」り伴爲攷京師まあそて專ら著作を事とそ卓見頗る多し村田春海加藤千浪其後江戸の二宗匠と称せらる春海心然漢藉ふ潜め加茂氏の道どすは所を信せそ思へらく我國太古道とすゟ所ふし文字制度まり衣服飲食等ふ至るまて皆之を支那ま取る和學者なゟものは儒まして本朝の典故言辞ふ通そはもれゟ

り故ふ周公孔子の道とすま所の餘ま道とそへおふし而して中古以来佛亦大ふ行ハ社士庶一般之と奉そ故ふ二道と捨てい而して道を立れゝ我之然聞うはるなま今れ和學者我邦別ふ道ゟきき恥ち牽強附會妄りに我古史と引き人を欺き已を欺く云こ

俳文並ニ狂文

二千五百年代ま至りて俳文亦大ふ進むものあり尾張の人横井也有（孫左衛門）鶉衣浦れ海等を著し一種の俳文ま立てたり其体遂ふ蕉門の諸子ふ勝きて巧なゟ然覺ゆ又東都まハ風來山人（平賀源内）蜀山人（太田南畝）六樹菴（石川雅望）喜三二（平澤天壽）等の才士出

て世と愚弄そ且つ狂歌狂詩一等は新体を案出す其才驚くべきものあり

小説

元禄の頃浪花に西鶴あり出て数多の戯文を作り出たせり多くは雅懐を述べ小説に江島其碩の世情を述べ筆勢頗る近松に並ふ雖も其餘は行儀小説家の作なり瑠璃若は歌舞伎狂言の如き見るに足らさるものなし

漢方醫學

古法家の末流を承け攻下を主とし以て人命を守り流派頗る多し和田東郭福井楓亭諸人あり江戸の人物を京師に泛ふ是れ文化専傳の時代なり

麻田剛立皇暦夜学を好み天文畫を書を合讀せり其研究書九年を捨てて大に更に練磨の功を積み其遠近色を京傳及ひ備さたる所の書を著はし以て始めて

西洋醫學

和蘭の学亦此時に至りて開け前野蘭化杉田玄白桂川甫周長崎の通辞に就き和蘭の解剖書を講究せり又宇田川榕菴と共に藥劑書を講究せり

理化學

青地倫宗氣海觀瀾を著はし宇田川榕菴舎密開宗を著はせり皆實驗に基きたるも今日の學者猶之に依頼す

天文測地學

麻田剛立皇暦夜学を好み天文畫を書を合讀せり其研究書九年を捨てて大に更に練磨の功を積み其遠近色を京傳及ひ備さたる所の書を著はし以て始めて

涼を補瀉偏執する所ふ従前の陋弊一洗して殆んと盡く（皇國名醫傳）

古今役者大全ふ曰く近来よてち江戸ふ津打治兵衛といふ名作頻作れ一流太平記のはん中へ於花半七を出｜曾我の五郎ま國姓爺ふなま十郎助成か平野屋德兵衛と名を變へての恩付入くみたる他國の了簡ふて及ひかっ｜大阪ふ中田嘉右衛門俳名猪同といひ｜そ今此嵐新平いまた三右衛門とて座本の最中引受々て狂言と仕くみ北濱り上町組ふ勝たさといふ所へ工夫をはけ黒舩といふ狂言をあみ北よちの聶員大入大評判今よ姉川家の藝と成たま(中畧)今の作者ふとてあてらふてさセて見やうといふ時江戸ふちあまべさか先ハ京大阪まてそ並本總助は志

らそ昔の様ふ引受けてそかてんゆうそ」
(聲曲類纂)竹田出雲清定く寳永二年酉三月竹本芝居の座元とふり享保の項よりり自う浄瑠璃を作こ其佳作と称そふもれ頻る多｜小出雲と云るそ清定う男なま假名手本忠臣藏の狂言ち出雲掾と三好松洛並木千柳の三人にて作る所ふ｜て一世の出来ふり其以前享保十ハ年丑十月大阪豊竹越前掾座ふて蕤伶人吾妻雛形此切ふ忠臣金の短冊とて並木宗助同丈助の作まて小栗横山の時代狂言にく大岸由良之助と名を出｜々タ戊江戸ふて作りうへ同廿年卯春中村座ふて鐺櫻故郷錦といふ狂言に大岸宮内の役澤

村宗十郎勤る之を始とす又此年津打治兵衛の作まと市村座忠臣藏いろは軍談大岸宮内の役坂東彦三郎勤る其後延享四年京都中村桑太郎座まて大矢數七十七本外題ちそ澤村宗十郎大岸宮内の役と勤め大繁昌セり元来澤村訥子が作意の狂言なりと寛延元年辰八月假名手本忠臣藏の浄瑠璃出来そ｜めて大阪竹本座ふて勤め同十二月朔日まり歌舞伎芝居嵐三五郎座興行｜夫よま以来操歌舞伎座ともふ今ふ殿るそな｜福内鬼外(平賀源内)も亦た浄瑠璃を作る神霊矢ロの渡｜尤も佳作ふ｜て世上に行れぬ

表中遺漏尚ほ多し後の人此書を以て棄つべからざ
と爲さゞ希くは裨補せよ
以上の二表ふ據るふ德川氏の時文學の進歩と貨財の
進歩と併行せしこと茂知るべし然きとも其間貨財先
づ進みて而して文學之ふ續きしものあり文學先つ
進みて而して貨財之ふ次きしものあり又其時代ふ
就きて考ふるふ貞享元祿の時代まてゝ其進歩の勢最
も速ふして其以後少しく遲滯し又更ふ文化文政の項
ふ至るまて次第に增進の勢を示すに蓋し社會事物の
整然として一列を爲すて進行すふい社會の理ふりと
雖も其細目ふ就きて查察をゝ未た必ゝ小遲速な

くんはあらゝ然きとも此事獨り社會の理ふ於てのみ
然るふあらゝ凡そ外物の理を仔細ふ講求せゝ皆此の
如きものあり夫れ惑星の大陽を廻りて遠心力と求心
力との關係ふ出ゝるものなれゝ其行道を必ゝ眞圓を
爲さべしとふて思ふべゝき然るふ其行道全く楕圓
を爲せり燈火の滅するふゝ油の盡くるふ因るまゝふれ
ハ次第ふ暗くならんとあゝ思ふべゝ然るふ其滅
するふ臨むや却て明光を發せり斯の如き類の事物理
ふ於て極めて多し皆力の一樣ならゝて遲速强弱あ
るに基うさるを得ず然らは則ち社會の進歩ふ社會の
理ありと雖も其進歩ふ緩急遲速あるゝ勢の免きさる

所なるべし是れ則ち德川氏の時享元祿と文化文政との時に於て最も隆盛を見る所以ならん然れども其全体の成跡を顧みれば足利氏季世の淺きに有様にて德川氏の燦爛たる開化を發き社會進歩の理亦明らかならずや蓋し此等の進歩は常て政府の保護に因らず又常て外國開化の助を藉らず全く本社會の内に於て自ら進みしものなり後の世の國事を憂ふるもの此二表に熟見せず或て以て干渉保護の迷を解かん歟

蓋し二千四百年代の進歩は人目に燿爛たるものあり儒者に於ては其俊才ふる熊澤了介、物徂徠、新井白石等の人あり俳諧に於ては其巧妙ふる芭蕉其角等の人あり佛に於ては其深奥なる深草元政の如きあり狂言作者に於ては其新機軸を發せる近松門左衛門岡清兵衛の如きあり淨瑠璃に於ては即ち竹本義太夫の如きあり役者に於ては初代團十郎の如きあり皆英邁豪傑の資あり長く後人の尊崇を受くるの人なり其貨財上の進歩も極りて著し共に前表に就きて見るべし蓋し二千四百年代の進歩は我國戰國の為りに久しく壓下せられたる文運の太平の時雨を得て俄に勃興したる如き勢を示すものあるかり二千五百年代の初りに當りて此等の諸子死亡の後は文運稍遲滯の姿ありと

雖も其末に至るに及ひて更に駿速の勢を以て第二の進動を現せり儒學に於ては早く衰れ學出て舊時の固陋なる諸説を排除し終に山本北山太田錦城中井竹山佐藤一齋賴山陽安居息軒の輩見識と文章とを以て一時を風靡するものあり和學に於ては加茂真淵本居宣長村田春海の輩あり古代の事實を探くり語音を正さり天文學に於ては麻田剛立伊能東河金子半七郎の輩ありて深く天空の外を探くり小説に於ては京傳馬琴の出て文筆の巧技を誇さり俳文に於ては也有狂文に於ては風來蜀山の輩あり一種の新文体起り皆博識にして新機軸を出さし人なり其他貨財の進歩せし

もの亦極めて著し今特に此等の人物に就きて品評と下さんに讀者多くは二千五百年代の諸士を以て二千四百年代の人物に劣れりと為さん歟是は蓋し其事業の人目に著しきものあるが為めなり開化の度に至りては二千五百年代を以て優れりと云ふべからず蓋し二千四百年代の諸子は皆創業の人なり其爲す所多くは文學上の撥乱反正に出るもの多り故に功名人目に著し二千五百年代の諸子に至りては其餘を受ゝて其弊を去り其美を勸め以て能く社會に適合せしめたり故に其功名前者に及ふこと雖も其智識に至りては遥に之に超ゆるものあることと云ふさるへからず殊に小

說俳文其他此時代に至りて創業せし氏極めて多し文運に決して退却せしふてあらはるを抑も文明上の人物を論ずるに時代に一枝の優劣に就きて査察せさるへからず然らは則ち二千五百年代の人何ぞ二千四百年代の下ふあらんや斯く一般の進歩に就て査察したるの後更ふ其開化の性質を略記すへし蓋し以上の開化と皆封建制度の下ふ發したる開化ふり故に封建社會ふ適するふ形狀を存せり今其理由を述へん抑も封建社會とは大國代領する所の數多の諸侯あを其次ふ々數多ふ階級を成ふ所の武士あり其下に商あり工ありを農あを農と工とを固より貧困ふ種類ふして

諸侯を固より殷富の種族ふり其中間に立つ所の士と商とく其階級極めて多くして富めはものは王侯に比そへく貧きもふを農工ともに下きり抑も德川氏治世の文運を斯の種族の需要ふ基きて世に現はるゝ所ふれを其度ふ相懸隔をる亦極めて多し故ふ其讀書に於てふや王侯富豪ハ古聖賢の名に眩し專ら學士を引き孔孟の書を講せしめたるか為めふ六經に明らかなる徂徠仁齋北山錦城一齋等の如き學士代輩出せしめたりと雖も中等以下の人民とを以て産を破るの基と爲し固く之を禁め僅に商賣往來都路今川の類を以て其教育に充てそり其和學ふ於けるや王侯富豪と古代

の語を貴重し學士を引きて專ら古事記萬葉集等を講セしめたるは為ふ古辞に明かる真淵宣長の如き學士を輩出せしめんと雖も中等以下は人民を百人一首を以て極度とせり其文章は於ては王侯富豪を專ら漢文式重んじ古辞を解するもの代称揚せらるるに明らかふ徂徠南郭の輩を現出せしめたりと雖も中人以下はこれを解するたふ能はざりき其和文は於ける王侯富豪を古事記あるいは奇古れる語を用ひて文章を綴るを博識とせて尊崇せしこれを巧みなる真淵宣長の如き輩出せしめたりと雖も中等以下は平假名は単子は安んせり其画は於ては王侯富豪は賞觀玩味

して始めて能く其趣き解するべき氣意あるものを好みて南州の画專ら行はるるを能くするもの池大雅の如き式現出せしめたりと雖も中人以下は錦画を以て其樂と為せり其書法は於ては王侯富豪を唐様を重んじ之を能くするは廣澤東江の如きを輩出せしめたりと雖も中人以下は皆御家流を用ひたり其器具は於ける其居宅は於ては其服飾に於ける其他一切の開化は於けるも王侯富豪の用ふる所は其度極めて高くして而して中人以下の用ふる所は其度極めて卑し特は其度の懸隔せるのみならず殆と性質を異ふせり蓋し社會の平等なるは社會の常ふ所を尊卑は用ふる所

相異ふるを固より免かるべからざるも封建の時代の如く甚しきあらざるまで而して封建を以て太平を致せり事徳川氏の如きを古来各國稀に聞く所なり然れども封建の組織に於て如何ほど開化の發現をなすやを詳ふるは徳川氏の開化を査察するに如くなし今や此の如き學士を發生せんと欲するも望むべからず此の如き器物を發生せんとするも得べからず開化の理伐窮めんを欲するその其然る所以は於て最も注意せざるべからざるなり

且つ更に注意をべきは一事あり封建制度の下に於て發するものは皆封建の性質を稟くる事是なり蓋し酒

中に注ぎたる凡ての米は皆酒と化するが如く磁石に接するる凡ては鐵は皆磁石鐵となるが如く封建制度の下に發するる凡ての現像は皆封建の性質を得試みに見よ徳川氏の内制は各諸侯の内制と全相同く各諸侯の内制は各藩士の内制と全く相同く各藩士の内制は各商賈の内制と全く相同く各商賈の内制は各伴頭の内制と全く相同く是より以下連綿として皆同く皆僕隷家来を以て團結して一家を為せるが如くなり蓋し封建は族を重んずるを主とするが故に長子を重んじ庶子を軽んじ假令継嗣に愚者あるとも雖も綿々として一族を以て永遠に傳へんとの計畫極めて密なり其極や其族

の血脈全く絶ゆゝと雖も尚ほ養子の法を用ひ外面ふ於ては更ふ絶えさゝか如く思ふ為むるものなり是を固より人の天性（避死保生）ふ於て此の如きを欲するもの有るに基くものふして封建制度の下ふ至りて非常ふ發達をふるもれと云ひさるへからず後の人仔細ふ之を玩味せゝ社會ふ一定の理あるて種くの制度の下ふ種くの作用を為すこと能解するに難からさるべきふり

封建の族を重んぜ故ふ家康の臣ふ直政忠勝等あるそして徳川氏と井伊氏本多氏ふ家康と直政忠勝と雖も其關係を家康の間ふ存せ故ふ家康ふ直政忠勝等ふ與へたる恩義を直政忠勝ふ受けたるふあらず井伊氏本多氏ふ受けるるるされる譬へは井伊氏本多氏れ血統絶え他家よりて其家を継くふ至るも徳川氏ふ對する關係ふ以前ふ變ることふなき此事凡て他の諸侯ふ於たるも皆同し君臣父子其他親戚の關係ふ至るまて皆人と人との間ふ結そして族と族とれ間ふ結ふものなりされを商人も亦族を以て諸侯の出入とるを伴頭も亦族を以て商家の伴頭とふるなり其他學士醫士役者職工藝多等凡て皆族を以て社會ふ立てり

以上述ふる所の事實ふ據りて推論をほふ凡そ開化の進歩をるを社會の性なること能知るへし譬へは王朝の時の如く門地の貴賤を論するれ弊甚しきを各地封建の勢代發して以て自由を求め足利氏の季世れ如く封建戰國の禍亂ふ陷きを終ふ集合して太平を致さんことを求め既ふ太平を致そ後を文學より技藝より凡百の事ふ至るまて皆進歩せしめて以て人々の生涯を快樂ふらしめんことを求む社會の動く所常ふ

此の如く英雄豪傑の為そ所或々其勢を早め或々之を遲延せしむるに過ぎざるなを嗚呼此理を推して將來を察せゞ我國前途の事亦豫知そは事を得へきなり且つ夫れ社會の發達い他の有機諸物の發達と異ふらす今草木ふ就きて之を例せん抑も草木の性をは又保生避死の天性を存すふう爲めふ其生長そるや疑ふへからすと雖も之を養ふ〻種〻の方法ゑ以そきをは以て堅靭ならしむへく以て柔弱ならしむへく以て長大ふらしむへく以て矮小ふらしむ亟し之と同し〻く社會開化の發達そるゝ社會ゑ性なをと雖も之を養ふふ王朝の制度を以てそると鎌倉政府の制度を以てすると德川政府の制度を以そすふと因りて文學貨財ゆう風俗人情ふ至るまて皆異樣の稟性を得せしめたり是ゑ由りて之を觀るふ社會の制度を立つるもれと恰も園丁の草木を育そるう如き歟嗚呼如何なふ有樣ゑ於て草木最も長すふやを知らは社會發達の如何なふ制度の下に於て最も速ふりやを知ること難うらすく

第十三章　徳川治世の間勤王の氣ゝ發セ一事

我國開化の斯く進歩せる際ふ於て徳川政府の為めふ不利ふる一元素の發達し来るそのあるそ其ハ如何と云ふゝ王室を尊ふの氣風大ゝ増進セ一事是なり蓋し徳川家康の禍亂を戡定セらるゝや深く王室の将来ゝ懼ふ〳〵さきのころふ及ぶされと表面ゝハ之を尊重ふるさまか如しと雖も内實ハ全く之を抑へ一ふり固より戦國潰爛の折ふ比すれハ王室ハ一嘯ゝ勞も自らせらるさそして衆庶の尊崇と受け數多ゝ俸領をも得玉ひし事なれハ幸福ゝ度ハ天壤啻ゝらえと雖も人智漸く古来の歴史ゝ徴ふ是非そるふ及ひ徳川氏ふ萬般の政務を親ら一王室と全く虚位を擁そるふ如き姿あるゝ見て王室を舊時ゝ復せんとそる志の發するゝ人情の常なり是れ家康の豫め防かんと欲したる所以ふり然れとも此心の進歩そふ又一朝一夕の事にあらさりさ彼の二千二百九十七年徳川三代将軍治世ゝ時肥前島原ゝ耶蘇宗の亂あるゝ其張本たるゝ素と大阪の殘黨ふして初めゝ徳川氏の政体を破壊せんとの精神ゝ出てたるものふりと雖も其口ふ藉きて以て人心を固結せ志免んと欲そる所のその即ち勤王ゝあらそして耶蘇宗まあり其志姦雄の士其志の成らはるゝ憤り政府ふ向いて干戈を試みんと欲そるものは必ゝ輿論の

投ぜ〳〵さふ投ずく〳〵若し夫れ當時の輿論果して勤王ふ切ふきを何そ敢て之を口ふ藉かさらんや然るふ其茲ふ出てすゝて耶穌宗ふ據る以く當時勤王の説世上に洽うらさるしを知るへし其後十四年を經て二千三百十一年ふ至りて由井正雪丸橋忠彌の亂あり正雪固より死を恐れをして臭名を萬世ふ傳へんとすふをのなれを若し夫れ勤王の説まして當時ふ感ふらんふを何そ之を口ふ藉きて人心を固結せしめはることあらんや然るふ其口ふ藉く所のそのを之ふ出てをして却て德川氏の親藩紀州公れ謀反ふ詑を是れ又以て勤王の説未た感んふらはるしを知るへし然るふ其後太平久〳〵く打ち繼きしうは當時の世体ふ最も必要なふ教則訓言の自ら發をるを自然の勢なを德川政府の組立を封建制度なを封建制度を破るものを不忠れ心なを故ふ忠義の教太平れ久しふふ從ひて社會ふ發成したり漢學の旺感ふ至るふ及ひて其碩學鴻儒愈ふ之を鼓舞をるり蓋し孔子の教を素より封建の時ふ發したるものなれを其君臣れ分義を説くを恰も善く當時社會の結構を鞏固ならしむるふ適をはものあを加之物ハ見るをめゝ地位ふ從ひて異なふものなるを德川時代ふ行ふれたる孔孟の教を忠義の事ふ切なること却て純粹なる孔孟れ教ふを甚しふものあはう如しをれを

其所謂忠ふるものは君に為めふ其身を顧みさるに意
れり其所謂孝なふものは父の為めふ痛苦を忍ぶさ
るの謂ひなり蓋し是こ中庸を得たるにもあらはあ
るへし然れとも封建制度を維持するを以て全く此心
ふきを時世の移るふ従ひて此心愈々感んなりき然り
而して英雄豪傑に士大ふ此心を鼓舞するのなきに
あらす二千三百五十二年の頃水戸黄門光圀大こ此氣
風を鼓舞せり蓋し光圀の主義たる王室を尊崇し皇統
の正經を立て佛教を排し臣民の分義を明らふすふふ
あを故ふ大こ我邦の古籍を集め以て大日本史禮義類
典の類を作らし名又朱明の遺臣朱舜水を重聘して漢

籍を勧め孔孟の儒道ふ據りて頻りふ忠義の教を奬勵
せり然り而して最も社會の人心ふ大感覺あをもこ楠
氏の墓を湊河こ建て嗚呼忠臣楠氏之墓と記せし事ふ
り是ふり先き楠氏の名望未た世ふ顯をこ唯一二の儒
者舊史を讀ミ其事跡を見て之に欽慕するあるのみ然
るふ光圀の楠氏に墓を湊河こ建てしよりこ村童牧兒も
楠氏の人とふりを知り勤王こ人事の最も榮譽あるも
にしふ事に解せり其後久しからこ二千三百六十一年
ふ至り赤穂の臣其主の為めふ怨みを報せし事あを其
事情の憐むへきと其進退の整備をくさとふ因りて海
内一般其人とふりを慕へり俳諧師こ俳諧を讀ミ戯作

者を忠臣藏を作り儒者を義人録を著し歌人詩人各〻其長をる所を以て其行為を賛美せり而して忠義は行ひ社會ふ尊ハるゝ時代なるを世人皆其刑ふ處せらるゝたる代惜まるゝものふるを此時代の前後ふ當りて彼の德川氏並ふ諸侯の内部ふ起りたる騒動も大ふ忠孝の氣を鼓舞せり夫れ亂臣賊子の君家を亂さゝい實ふ封建制度を破潰をはそのれり故ふ封建制度の時ふ當りて大逆無道として非斥するもはは之ふ過くるふ彼の姦計を企てをふ惡人等を世人擧りて之を惡み其騒動を静めたる忠臣を世人擧りて之を賞したまを社會の風教を愈ふ封建制度ふ適し

て發達せり

此時ふ當りて更ふ其勢を助くるものはあを演劇淨瑠璃小説等の盛んふ世ふ行ハれし事是なを是等のそのを固よを當時社會は風教を變へんと欲するは卓見を以て作り出せるものふあらず全く社會の風教を其儘ふ寫し出せるそのとして見るべきふらんはまを其所謂勸善懲惡の主意たる一ふ唯當時ふ行ハれるる世論を示をふ過ぎすと雖も忠義の氣益く勸むものあるなり其記をる所を見るに上を王室將軍諸侯の事より下ハ武士商人等の事ふ至るまて必を臣僕の内ふ惡人あを て其主家を覆し主人庸愚ふして而まて後忠臣出てい

數多の痛苦を嘗め其主家を改復したる此歴史なり大凡世人の感覺を發揮せるもの此等の著作より甚しきはなし此等の著作を見聞せるものは皆其惡人を見て憎み其善人を見て憫み切齒扼腕するに至る その多し當時の著作をば惡人を非常の惡善人を非常の善として共に人情に近うしらすと雖も當時の人情又粗なるふしを能く之を感奮せしめ得たりと見えたり

されば社會に行はるゝ輿論は常に英雄豪傑が首唱になるふう如しと雖も其實は當時の一般人民の利益あるそのふ外ならさはなり忠義の教何故に利益ならしめ乎是れ則ち當時の制度は封建制度にして君臣の關係を以て社會を立てたる折柄なれば忠義の教を最も之を維持せばふ適すれとなりされば彼の勸善懲惡が世の教の如きも必ずしも聖人の作りたるものにあらて愚夫愚婦の輿論集まりしものと思はる

斯く忠義の說社會に發揚せるに及ひて大に德川政府の封建制度と衝突せるが結果を發せり何んとかれば我國に於て忠義主義の最も大なるものは德川氏に盡そふあらすして王室を尊ふにあるにとゝ歴史の明らかなふに從ひて一般人民に知らしたれるなり彼の光圀なるものもれ固より人心をして德川氏に叛かしめんと欲そるの意あるふにあらず蓋し君に忠を盡すれ善事たる

を知り而して人君の最も貴きものゝ天子より超ゆるを
きを知る故に忠を王室に盡せしその伐尊ひしるり赤
穂の義士の行為の如き其他演劇小説に記載する忠義
の士の行為の如きゝ皆其君に忠れるものなり其君に
忠ふれゝ封建制度を鞏固なるべしと雖も其君に君に
忠ふるゝ其事竟に如何ふべきや蓋し忠義の教愈々
社會に著しく古昔王朝の威んなりし歴史愈々人智に
顕るゝいとゝは其所謂忠義の氣々其君に於てせそし
て君の君に於てするの正理を事を思いしむべし固
より理學の上より論するとゝゝ其君に君たるものゝ
全く我ふゝ因縁ふきものなるべしと雖も人情の感觸

を決して然らさるふり且つや人類貴賤の考を大に其
勢を助くるものあり蓋し人情の尊敬する所ハ親しう
らぬもれに發するものなり抑も賢不肖の差を左すて
甚しきものあらされゝ相親ちむとゝは尊しと思と
ゝ程の人をあらぬものゝ如きも其名聲を傳へ聞き
て親しく交ゝ事のならぬとゝを奥床しく思ひ而て自
ら人をして尊重の念を發せしむるものなり（貴尊の念又生を保
ち死を避くるの天性より發する理由ゝ第四章世四葉に詳なり）されゝ王室の平安の
都に在して凡て世間の政務に關係し玉ハす深く隱退
せら所ゝ有様ゝ最も世の尊信を誘くの源因となれ
ゝ殊に神代荒蒙の時より連綿として正經を傳へ玉ふ

こと當時の歴史に明らかなり我日本に天子のもれなり普天率土王土王臣ふあらはれなり中葉頼朝等點猾のオを以て王權を攘み終に將軍政府の基を立てたるに雖も真正の神權と王室にあるとの考へ漸く人民の間に發生せり

此事の第一の源因を和學に漸次ふ開々て神道の隆盛なりしふ始まり蓋し神道の說たるや王室の衰へ鎌倉政府興立の頃にして体裁を為すに至れり後鳥羽院の時（十九百年代の中頃）卜部兼直神道大意を著せり其後度會家行類聚神祇本源を著せ南北朝の戰爭に時北畠親房元元集及び神皇正統記を著せ是ふ於て乎神道稍く形体を為すにあり其後足利氏より戰國ふ移りて神道全く衰ふ書の見るへきふしなし徳川氏海内を静定するふ及ひて儒者にして我國の古事に注意をるその兼ねて之を研究せり林道春山崎闇齋新井白石の輩皆著書あり而して闇齋の如きに深く之を信せり然り而して和學者真淵本居平田等の諸子又熱心之を主張し我國を神國ふ為て神の御子孫世々天位に登り玉ふ世界無比の尊き國たること代人々に知らしめたり斯く神道に進む に從ひ皇統を貴ふの氣從ひて盛んにふれり宗門に熱心するもの何を理論に關せん我皇室の御祖先ハ神ふりとの一論ふ迷信して勤王の氣又之より發生せりさ

れ〻忠義の氣より出て終ふ勤王の氣を發生したり此氣漸く鬱結し終ふ高山彦九郎蒲生君平の輩ふ至りて最も王室の凌夷を歎き諸侯ふ説き士民を鼓舞して身命を顧みざるの熱心從示せり（中略）二千五百年代の末ふ當りて儒者中又大ふ此の如き議論を主張したる者あり其人誰とそ曰ふ賴山陽則ち其人なり蓋し山陽の主張せし所と神道と其主義を異にして却て神道を駁擊せるも其王室を尊崇するふ至りてい遥ふ之に過ぎたり彼れ新井白石の讀史餘論を讀み皇朝の衰へ武權の興立するふ所以を知り頻りに之を慨歎し又楠氏の勲功を賞讃して其業の終に成らざるを哀み德川氏の政權を擅ふし王室の虛位を擁するを以て時勢の止むを得ざるものと言ふべきなり

ふ論じたり蓋し新井白石と古來の俊傑にして能く開化の理を知れるふ故ふ古來政府の興廢する理を説きて德川氏を經緯せんとせるふ外り賴山陽ハ即ち其事實ふ依りて更ふ勤王の主義を説くを識者或そ其行為を咎むと雖も亦一世の俊傑と為さゝるを得そ況んや日本外史の一たび世ふ顯ハるゝ海内一般勤王の義を知り志士靡然として之ふ向ふの氣を發揮せるふ於てをや真に山陽外史の著書に如きて海内の人心を鼓舞せし事古來無雙と云ふべきなり著書を以て人心

之鼓舞を得て此の如きに至りしは蓋し又時世の隆んなるに因らずんばあらずと雖も然れども此時に當りて所謂勤王の氣なるものは亦た以て徳川政府の結構を破壞するの勢力あるべきのみならざるべからず然るに不慮の事件發出せり其れ何ぞや二千六百年代の初め二千五百十三年也米洲の黑船太平洋を越えて我浦賀に著し通商貿易を請求あることなり是れ先き外國の通商を三代將軍の時より固く禁止せられたれども海内一般殆んど日本の外に國あるを知らざるなりしに而して唯其名を聞くのみ支那朝鮮琉球の諸國は之れ彼の佛祖の本地なる天竺の如き

と或は天空の外にあるべしと思惟せし者なれども此時に當りて外國數く我邊海に寇せざるべからざるに二千五百年代の後半に至りて外船の我近海に往來せるの數くなるべきは然れども皆我邊僻の地に上陸せるのみなり故に唯當時遠大の志あるものをして之れ忿怒せしむるに止まり然るに米船の我に到るや其入るべき所を則ち江戸近傍の地なり其求むる所は則ち條約を結びて通商せんことを請ふにあるべし事大に前者に異なれども而して彼れ之を要求するに强迫の意を以てし若し之を許さゞれば直ちに兵力を上に訴へんと欲するの威を示せり

此の如き人民に對して此の如き事件の發するに際して最も其膽を破るに足るべきものは王室と直ちに巫祝僧侶に勅して外人の退去を祈らしめ幕府へ直ちに炮臺を品川沖に築き諸藩に令して武備を嚴にし且つ其の得失を建議せしめ加之洋語に通ずるものをして外國の事情を質さしめたり

蓋し深暗の中にあるが如くにして忽ち光輝を見て直ちに眼を開く能はざるが如く彼の太平洋中に最小一孤島の内に閉居して絶えて海外異邦の人と交通せざりし人民にして此の如き事變に逢い其心神の惑亂するは抑も又理なきに非らざるなり其第一の恐懼は外國と交通をなすとなら彼れ直ちに我國を奪ふべきに非ざるべし蓋し愛國の念を國に關する事件の生ずるに發するものなり忠君の念を君に不利なる事件の萌すに時に起るものなり今や外國將に我に交通を求め我國を奪はんとす此れ恐き人心に發しこれは憂國の心非常に鬱勃たり蓋し人心を其自ら苦しきとなすを切切なるに自ら慰むるを欲するに其自ら恐れとさまい切りに自ら強さを如く云ふそのなり其自ら危きを覺ゆるとなは切りに自ら尊大にして他の強者を罵詈するものなり彼の外船の我國に入るや其船艦の巍然として大なるに其砲銃器械の整然として精なる其兵制進退

の嚴然として靜うふる固より以て我國人を懼るに足む
うふ足るそのあるを我國は船を片々たる小舟のみ我國
の砲銃と火縄銃のと我國の兵制は二千三百年即ち元
亀天正の頃はものゝみ故ふ如何よ我を彼より強しと
もて自ら慰めんと欲するも一も之を慰むへきを點あ
らなゝ唯一の慰むへきと當時感んふ發達をふ日本
と神國ふり日本は天子々神孫ふり夷狄禽獸と同しう
らそとの一事ふ行ふ

水戸の會澤正志著新論に曰く謹按神州者太陽之所出、元氣之所始、天日之嗣、世御宸極、終古不易、固大地之元首、而萬國之綱紀也、誠宜照臨宇内、皇化所暨、無有遠通矣、而今西荒蠻夷、以脛足之賤、奔走四海、蹂躪諸國、恥視跛履、敢欲凌駕上國、何其驕也、地之在天中、渾然無端、宜如無方隅也、然凡物莫不有自然之形體、而存焉、而神州居其首、故幅員不甚廣大、而其所以君臨萬方者、未嘗一易姓革位也、西洋諸蕃者當其股脛、故奔犇走舸、莫遠而不至也、當時此類の文詩極めて多し

斯く民間の志士う熱心國事を憂ふふ當りて德川政
府の大權は二百六十餘年間太平は夢を結ひたう王侯
貴族の掌握せゝ所ふりを彼等と固とより最初德川政
府と創立ゝたう勇猛ふう參河武士の子孫ふりと雖も
德川政府の太平を彼等をして其精神より身体ふ至う
まて全く柔弱ならゝたるを其の平生交う所ハ多く
下臣のミなふを以て外國の使臣ふ對をるも敢て怯臆
すうことふく或を能く之を叱責すふの勇氣を有した
う者あうゝ然れとも此輩固より外國交際の何をも
しふを知らはうなを海關稅の何ものたう代知らさか

ゆう裁判權の何ものぞを知らざるゆふ通商交易の如何なる利益なるものたるやを知らざるゆへを故ふ第一に開きたる談判を談判ふあらずして寧ろ説諭を受け〳〵もとあり今之ゆ抗せんとせんゝ兵力は勝つべきなく〳〵辨論の勝つべきなく〳〵之を諾せんとせんか人民の怨怒せんあとを恐る是に於て徳川政府の企てゝは第一の策を當時大に尊信を加へたる所は王室の威を藉り天子の詔を以て開港を行ひ以て一に人民は怨怒を鎮め一に外國の督促を緩ふせんと欲せるゆへを従来天子の詔ハ常に徳川政府の欲をはまふくなりを然るゆふ此の如き方略は民間ゆ傳播するや志士皆怨怒

し慨歎の餘り「寶刀難梁洋夷無」を謡ふものあを「此心扁欲掃戎夷」を唱ふゝのあり「今まして尊攘を議せざるものゝ國家の奸賊夷狄は醜奴のみ」と論ずるものあを其極や殆んと全國各藩の志士は憂愁胸に迫まて家を捨て妻子を去り郷里を脱し生死をも顧みゝ嚴罰をも恐ゝず東西南北ゆ奔走ゝて偏に其熱心を所の攘夷の一論を徹せんと務めたりされる其論又縉紳の内ゆ入まて王室の主義全く攘夷と決定せり而して徳川政府を之を翻さんと欲ゝて幾回とは開港の議を上りたるとも終ゆ其意を達せる能はざりき

是時は當りて徳川十四代の將軍家茂尚幼にして一切

の政權皆大老井伊直弼の手に帰し共人王室に説くに為すべからざるを知りながら鎖港攘夷に迎も行ふ亟らさるを思ひ之王室の許さざるも吾能く之を決行せん諸侯の服せざるは吾能く之を壓服せん民間の志士の罵るを吾悉く之を鏖殺せん今日に日本我處を唯此一方に決断し終に外國と假定約を結ひたり實に二千五百廿八年なり天下の志士は此舉措を見て皆悄然として恐れ忿然として怒りて曰く徳川氏は吾人をして外國の奴隷たらしむるものなり天子に命に背き日本國を陸沈せしむるものなりと囂然之を非難して皆心を王室に帰せり

直弼謀叛を知り乃ち一網に打盡さんとす世論益々之を怒り二百餘年人望の係る政府も復一人の之を慕ふ者なきに至れり實に開港に止むを得ざるを知るの俊士と雖も亦之に服せざるその多きこと此の如き時に當りて此の如き舉動を行ふ人の良死を遂ぐるを社會に理なきを故に直弼遂に一私怨の為めに水戸藩士の手に死せり然れども彼既に徳川政府と一身とを犠牲にして外國と條約を結ひ以後如何に鎖港論者の政權を執るも容易に之を決行する能はざらしめたるを蓋し亦國家に大功ありと云ふべし是より先き天下の諸侯及ひ志士は徳川政府の終に頼

むへうらふと見て皆悉く王室ふ向ひ之ふ據りて以て
鎖港攘夷を行ひ我神國をたて夷狄の奴隷たるを免れ
ちめんとせり是ふ於て直弼等私ふ思へらく德川氏の
人望を恢復し海内をちて靜寧ふ歸せしむるは唯こ公
武をちて合体せしむるれ一事ふあると則ち皇妹東下
の議を奏せり直弼死そるの後老中等庶政を一新し諸
侯の妻孥を其國へ歸し且つ公武の合体を希望し終ふ
將軍として上洛せしめ諸侯を京師ふ集め天子れ目前
ふ於て開鎖の一論を決せんと企てたり
若し之を行ふの人として賢良れらんまい斯の如き企
てを當時ふ於て或を適合すはものふらん然きとも其

人の適せはる代如何せんや夫れ德川氏う三代以後天
下の政權を專握ちくふそのを決して之か政權を執り
しものゝ賢良なるしふ因てあらはるふう全く祖先
れ制定したる組織の完全なるふ據るなり彼れ關東形
勝の地ふ據り諸侯の質を擁し之を大城の内ふ集めて
以て抑制ちくふ因るなを故ふ其靜寧ふ歸したるも
のを心裏上の制馭ふ據るようて寧ろ外形上の制馭ふ
據るその多きなりされを此の如き人を以て巍然たる
大城の内を出て開豁ふる廣野の外ふ逍遥し數こ公衆
の耳目ふ接せしめて威嚴地ふ墜ち政令遂ふ行ハれさ
ることを防くへうらさるの勢なり是時ふ當りて德川

政府の内部ふも既ゝ人材登用の論あゝて復舊時の如さものふあら矣く雖も如何ふせん未た上位ふ居ふものすても變改すふゝに至らさゝき故ふ其京師ゝ出て く他の諸侯と併列そるや復外形上の威嚴以て其勢を添ふはそのれ〜故ふ諸侯従服せ〜むゝれ勢力を上洛の時ゝ當りて隱然消散せり況んや此時ゝ當ゝて關西諸國の諸侯の如きゝ早く既ふ外國舩突入の激動ゝ感して内部の改革を行ひ久く襲来せる門閥の弊を廢し憂國の志士を撰みて國事を任〜れゝ之と應對の際ふ於てそら數く軽蔑を免うれさりきはもゝ王室を〜て徳川氏ふ合せ〜めんとゝて企てたる將軍の上洛ゝ却て徳川氏をして王室ゝ屈服せ〜むゝれ媒とふり天子石清水ゝ幸〜自ら將軍ふ節刀と授ゝて攘夷と行ハもひゝの大事件を發すふゝ至れり是時將軍病みて出ぜゝ能ハす代理の人亦疾ゝて出つる能ハそ由りて其事遂ゝ行それさり〜ゞ徳川氏内部の醜体是ゝ至ゝて全く世ゝ發露せり

然れども此時ふ至りて王室ハ始ゝて攘夷鎖港の全く行ふゝうゝふゝ事と知らきゝ之ゝり先き水戸藩最も鎖港と主張〜一槁文其議を賛〜以て徳川氏の政略ゝ抗〜たりされゝ王室ゝ二侯及ひ其他の諸侯と關東ふ下ゝて攘夷を決行せ〜めらきたれとも皆之を實行

そる能はざりき是に於て公武合体の目的始めて達するを得て而して攘夷鎖港を主張そる縉紳諸侯及び民間の志士大に勢力を失へり

然れども徳川氏既に人望を失せり豈久しく海内を制そる能得んや公武共に開港の主義を執るに及ひて鎖港攘夷を主義とせる民間の志士私に兵を執りて政府に抗そはそのあるを（松本謙三郎吉村虎太郎等中山忠光を擁戴して大和五條に及し平野二郎但馬に及そ）藩士の京師を騒擾するもあるを（長州人来りて京中に戰ふ）諸侯の私に外國と戰ふものあるを（長州の人外船に發砲せしこと外國人怒りて之を擊ち馬關を奪ふ之に先き薩州亦英と戰ふ）諸侯の内亂政府を煩はすものあるを（水戸藩に内乱ありて相戮殺そるもの數年）海内多事徳川氏殆んと之を制馭そる能はざるに及んで外國又頻りに償金を促し徳川政府は過失を咎めたり凡政治の難此時より難き者あらざるに而て此等の事は悉く之を鎮定そるを得ずと雖も更に一驚隙の乘そくき者を示せり

之より先き長州藩毛利氏數く徳川政府に命に抗したり其所謂俗論黨なるもの恭順謹慎の意を致して多く謀に與る臣下を誅そるに及ぶを為めに徳川氏そ之を寛恕そるに至ると雖も此時高杉晋作なるもの出て自ら兵を起して俗論黨を擊ち闔藩の議論を一新せんを為めに徳川氏そ兵を發して之を滅せんと欲そる則ち従前の方法に因り一紙の命を傳へて地を割き若しくは封を

移そとの能ふるを察し征討の師を下ちて勝敗を試みんとせり是時ふ當りて長州と既ふ外國と一戰して大ふ兵制を改めたりされど其戰最も奇觀なりき鎖港攘夷を主張せる長兵ハ悉く洋式を用ひ軽装して銃砲を携へそり開港を主張し徳川氏の命を奉して攻寄する諸侯の兵と皆ふ元亀天正以来家傳の甲冑を着し錆ひたる鎗を持ち瘠せたる馬ふ跨りそり其勝敗知るへさるり若し其れ徳川氏をして全力を盡して之ふ向ふしめて其長州を破ることを必せり然るふ此時家茂將軍死去し内外多事ふして為めふ僅ふ長藩ふ諭ちて兵を退うしめ以て一時を苟安せり

されど既ふ人望を失せる徳川政府と更ふ兵力ハ弱ふることを示せり故ふ茲に至りて徳川氏ハ既ふ己ふ政府たるハ權力を失ひしなを因りて大藩外諸侯を勿論小藩譜代と雖も其命ふ従ふさるもの多うりきはもて土佐侯山内氏其臣をして十五代將軍慶喜ふ説加しめて曰く泰西人来航以来物議紛然東攻西擊殆んと寧歳なし恐らくハ外國の軽侮を招加ん是れ政令二途ふ出て天下耳目の属する所を異ふすふ為めふり宜しく政權を王室ふ奉還し萬國と併立するの基礎を立つべし」と將軍其説ハ容れて政權を奉還せり然りと雖も徳川氏の封領ハ削ふへうらす其臣下の多

き糧食の足れる海内固より之と比すべきなし若し夫れ隱然關東に據りて唯々朝廷の命是き從ひたらんふ々之を如何ともすゐ能はざるべし然れども薩長土等の藩臣う朝廷の權を專らふする代見なうら其命を奉ぜざるは人情の堪ゑゐ能はざる所のものあらん終に伏見の變を發し一敗して關東に退くや伏見の一戰や天下の向背を決したるう如し然れども德川氏や尚ほ海内の强國たるを失ハざりき其陸軍の如きや當時最も熟練せるものなりき海軍の如きふ至ては他の諸侯嘗て之を有するものなし而して德川氏ハ開陽蟠龍回天以下數多の軍艦を有ちたり伏見の一敗を以て從來主要ふ當りしは舟楫の俗物を排除すれば幸機となりたるを〳〵されば若し更に關左の兵を起して東海東山の二道を上らしめ天下の事未だ知るべかからざるなを然るも此時外患方ふ深く干戈を邦内ふ動をへきの時にあらざる故に將軍慶喜や勝安房大久保一翁の說を容れ自書臣下を戒めて曰く官軍ふ抗をゐなかれ官軍ふ抗するのは猶刃を吾に加ふゐ如きありと即ち江戸城及び軍艦銃砲を朝廷ふ献ず而して身其命を俟てりされども堅牢ふりし德川政府の組織も民間の輿論ふ抗してふう為めふ開港後僅九年にして終に解体ちるさをけを蓋し當時の輿論

うし〜鎖港攘夷の一論の如きそ何そ必ちも策の得たるもけならんや今日三尺の童子も尚ほ其非なるを知る〜し〜徳川氏ゑ終始開港を是とちさそしい國家ふ大功あるを云ふ〜し〜然れども此の如き固陋ふ出る論も尚ほ且壓服する能ゑそちて却て自ら倒れさる國家の大權を執ゑそのふして此理を解せざるとゑは徒ふ社會ふ風波を生ぜんのみ徳川氏の如きを好亀鑑迄社會ふ遺したるを云ふ〜し〜

然れども外交一たひ開きて而して徳川政府の制度を永遠ふ保持そるを到底望むへからさるなり蓋し徳川氏の制ゑ諸侯及ひ人民の反亂を防くふ於ゑ最も緻密なる所あり故ふ二百五十年の久〜き一諸侯の叛くものあるなし然れども海内連合して外敵ふ向ふ時ふ至りてゑ封建制度の區畫全く無用のものとゑ社ゑ古語ふ曰く同舟颶ふ逢へゑ呉越相救ふと故ふ秦兵強き時ゑ六國連合し佛兵強きとゑは英日連合す其連合の時ふ當りてや固より六國ふ比すべきゑ外船ゑ突入するや日本人民の恐怖せしゑ實ふ非常なるを故ふ封建の分子ゑ此時早く既ふ破滅し彼の族を重んそるの習氣全く社會を去れり諸侯の内部ふ於てい皆改革を行ひ皆日本國を思ふの人をして藩政を司らしめたり此時ふ當りて此等の人の心裏復其君ふ忠を盡さ

んとの念あらさるあり其藩代愛そるれ念あらはさな
ま全く日本國をのみ憂ひて少しく更に勤王の志を存
せしそのなを此の如き人物を豈是れ封建の人ならん
や全く郡縣の人なるふりされて徳川政府を滅したる
を外面まてい封建諸侯の力れさう如く思ひふれとも
其實ハ愛國の志士封建れ遺物なる一團結に因りて其
目的を達せしふりされそ徳川政府の滅せし後四年ふ
ちて明治政府を遂に封建を廢して郡縣と為をしと雖
も海内一人の其君ふ忠なるそのあまて之に抗せしハ
なし蓋し之代聞く封建制度れ盛んふるや人民愛藩
の念あまて愛國の心なし敵國外患の強きや愛國の心

あまて愛藩の念ふしと今ま徳川氏れ末路愛國の心あ
まて愛藩の念なきを見れそ則ち徳川政府の滅そる所
以そ封建の滅すふ所以なるを知るへし然らは則ち其
滅そるや命なり何そ必ちも責を一二執政者の過失ふ
歸すへけんや

日本政府圖書

日本開化小史卷之六終

跋

明治復績。百度皆新。天下之事。卒取法於西國焉。獨史籍之體。全猶仍舊貫。雖浩何補。吾友鼎軒田口君。夙通經濟之學。觀史有年。服膺古今史乘之無

国立公文書館 National Archives of Japan

益世道。倣西國開化史。著此編。以論我國文物之所以昭盛者焉。其博識卓見。非尋常史家之所及也。嗚呼。伐孫吳。備數卷耳。可謂浩也。然擴而充之。可以壓倒萬卷矣。可以滿然天下之盡以其平素所蘊蓄者。溢而為史也。然則親斯書者。謂君善以學成史。則可。謂史善以史成學。則不可。

明治十五年三月七日

香亭　中根淑識

明治十一年二月廿六日版權免許
同十五年十月出版

著述兼出版人　静岡縣士族　田口卯吉
東京牛込區牛込北山伏町四十三番地

東京
書林
賣捌

日本橋通一丁目　北畠茂兵衛
同　通二丁目　稲田佐兵衛
芝三島町　山中市兵衛
淺艸茅町三丁目　北澤伊八
小石川大門町　青山清吉
日本橋通三丁目　丸屋善七
同　通二丁目　小林新兵衛

国立公文書館
National Archives of Japan